

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月22日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520386

研究課題名（和文）戦国簡牘文字の地域差に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Identifying the Regional Differences in the Characters and the Calligraphic Styles of Wooden and Bamboo Scripts of the Zhanguo Period

研究代表者

福田 哲之（FUKUDA TETSUYUKI）

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：10208960

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国古代の墓から出土した竹簡や木簡に書写された筆記文字の分析を通して、始皇帝の文字統一以前における漢字の地域差の実態を検討したものである。戦国期の楚の領域の墓から出土した楚簡と秦の領域の墓から出土した秦簡とを比較した結果、秦簡文字は楚簡文字に比べて画一的で形体面の簡略化が顕著であることが明らかとなった。例えば短い3本の横画で「水」偏をあらわすサンズイは、もともと秦のみで使用されていた簡略体であり、秦の統一後に漢字の通行体として定着したと推測される。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed wooden and bamboo scripts excavated from the tombs of ancient China and examined the regional differences of Chinese characters and the calligraphy styles before the unification of the written letters by Shi Huangdi, the first Qin Emperor. In comparing the wooden and bamboo scripts excavated from a tomb in the Chu area and those in the Qin area, it became obvious that the letters in Qin were more uniform and simplified in their geometrical feature. For instance, *sanzui*, the three vertical lines representing water on the left-hand side of a Chinese character, was a simplified form used only in Qin Dynasty. It is assumed that this form was accepted as the general form after the unification by Qin.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：中国語学・漢字・古文字・戦国文字・簡牘・楚簡・秦簡

1. 研究開始当初の背景

近年、中国においては竹簡や木牘などに筆で書写された戦国期の筆記資料が数多く出土し、石刻や金文資料が中心的な位置を占めてきた従来の古文字研究に、新たな局面を拓

くものとして注目される。報告者は平成15年度から平成17年度にわたって科学研究費補助金 基盤研究(C)「戦国秦漢筆記文字の基礎的研究」の交付を受け、戦国から秦漢にかけての簡牘や帛書に筆写された筆記文字

の実態とその変遷について研究を行なった。また、平成 17 年度からは研究分担者として基盤研究 (B)「戦国楚簡の総合的研究」に加わり、楚簡の解読に携わってきた。こうした研究活動を通して、戦国簡牘文字の地域差に関する問題の重要性をあらためて認識し、本研究を着想するに至った。

秦の始皇帝の文字統一以前における戦国文字の実態解明は、古文字研究における重要な課題の一つである。後漢の許慎『説文解字』叙が「分かれて七国と為り、田疇は畷を異にし、車塗は軌を異にし、律令は法を異にし、衣冠は制を異にし、言語は声を異にし、文字は形を異にす」と記すように、戦国期においては、法律・制度・音声などとともに諸国間の文字にも形体上の異同が存在したとされる。このような戦国期における文字の地域差を論じた先駆的業績として知られるのが、王国維「戦国時秦用籀文六国用古文説」(『觀堂集林』巻七)である。王氏は、『説文解字』の「籀文」が西方の秦の文字、「古文」が東方の六国の文字に該当し、両者は画然として混在することはなかったと述べ、戦国文字分立説を提起したのである。

この王氏の説は、戦国文字の実態を明らかにした画期的な見解として高く評価されたが、当時は未だ簡牘などに筆写された戦国期の筆記資料は出土しておらず、また戦国文字の資料数も限られていた。したがって、筆記資料を含む戦国期の文字資料が大量に増加した現在では、例えば何琳儀『戦国文字通論(訂補)』(江蘇教育出版社、2003年)が指摘するように、「籀文」と「古文」との間には画然とした地域的分立は認めがたいことが実証されている。

確かに王氏の説は「籀文」と「古文」との関係をやや単純に図式化しすぎた嫌いがあり、戦国文字の多様な実態からすれば反証と見なされる例も存在する。しかし、新たに出土した秦の領域の文字と秦以外の領域の文字とを比較すると、大枠においては、ほぼ「籀文」と「古文」とに対応する形で一定の形体上の差異を認め得ることもまた事実である。さらに、王氏が指摘した形体上の相違以外についても、たとえば報告者が拙稿「戦国簡牘文字における二様式」(『第 4 回国際書学研究大会記念論文集 国際書学研究/2000』、2000年)において述べたように、秦簡文字と楚簡文字との間には明瞭な様式上の相違が認められ、楚簡文字の様式はさらに他の東方諸国の文字とも共通するものであった可能性が指摘される。つまり、王氏が提起した分立説は、今日においてもなお評価すべき点を持ち、今後は 1 次資料の分析を中心としながら、批判的に継承していく必要があると考えられるのである。

そこで本研究においては、王氏の見解を踏

まえた上で、ひとまず 2 次資料である『説文解字』の「籀文」や「古文」といった枠組みを離れ、1 次資料である戦国簡牘文字にもとづく分析を中心に検討を進めることとした。

このように本研究は、王国維の戦国文字分立説の再検討という意図のもとに、近年資料数が増加した戦国簡牘資料を用いて、戦国期の筆記文字の地域差の実態を明らかにするものであり、戦国文字研究のみならず、広く漢字の歴史的展開を理解する上で重要な意義を有している。

2. 研究の目的

本研究は、1 次資料である戦国簡牘文字の分析を中心に、戦国期における文字の地域差の実態を明らかにすることを目的とする。

戦国期に通行していた筆記文字の実態については、戦国簡牘資料の出土によって、近年ようやくその研究が緒についたところである。ただし現時点において簡牘資料が出土しているのは、秦と楚との二国の領域にとどまっており、他の諸国の筆記文字の実態は残念ながら不明とせざるを得ない。したがって本研究においては、現在公表されている秦の領域から出土した秦簡と楚の領域から出土した楚簡とを主な研究対象とし、両者の文字の形体面における異同を中心に詳細な分析を加え、文字の地域的差異の実態を明らかにしていく。

3. 研究の方法

前述のように現在知られる戦国簡牘は、秦簡と楚簡とに限られている。このうち秦簡は、副葬品のリストである遣策・行政文書・法律など秦の領域で作成された現地性文献である[文書類]が中心的な位置を占める。これに対して楚簡には、遣策・司法文書・日常の卜占を記録した卜筮祭禱記録などの[文書類]の他に、郭店楚簡や上海博物館蔵戦国楚竹書のような[書籍類]が含まれている。

楚簡の[文書類]については、秦簡の場合と同様、現地性文献としての性格をもち、楚の領域の文字の実態を反映したものと見なされる。これに対して、楚簡のうち郭店楚簡や上海博物館蔵戦国楚竹書のような[書籍類]には、楚王室の故事に関わる現地性文献とともに齊魯など楚以外の地域で著作され楚に流伝したと見なされる非現地性文献が少なからず含まれており、そこには流伝の過程における時代・地域・書写者などの多様な諸要素、特に楚以外の地域的な要素の反映が予想される。したがって、秦簡文字と楚簡文字との分析にあたっては、まず現地性文献である[文書類]に限定した比較を試み、その上で楚簡の[書籍類]のうち現地性文献と見なされる楚王室の故事に関する文献と比較することによって、秦と楚との文字の実態と

両者の相違を明らかにしていく。

一方、楚簡の〔書籍類〕のうち非現地性文献を含む可能性のある資料については、現地性文献の分析によって明らかとなった楚簡文字と比較することによって、逆にその中に含まれる楚領域の文字とは異質の性格をもった文字を抽出することが可能となるのではないと思われる。なおこの問題に関連する先行研究として、周鳳五「郭店竹簡の形式特徴及其分類意義」（武漢大学中国文化研究院編『郭店楚簡国際学術研究会論文集』湖北人民出版社、2000年）、拙稿「楚墓出土簡牘文字における位相」（『中国研究集刊』第31号、2002年）がある。

さらに楚簡文字の実態という点において注目されるのが、上海博物館蔵戦国楚簡『字析』の存在である。この『字析』は現在整理中の未公表資料であるが、報告者は2006年9月6日に上海博物館を訪問した際、整理担当の濮茅左氏からその概要について情報の提供を受けることができた。濮氏から提供された情報のうち特に注目されるのは、『字析』が楚文字の規範を示す機能を持ち、楚国における文教政策の一環として作成されたものと推定されるという点である。未公表資料であるため即断は慎まなければならないが、この情報によれば、『字析』は戦国期の楚国において独自の文字規範が存在したことを示す資料と見なされ、この点は本研究を進める上で十分に留意しておく必要がある。

このような意図から、字形面に注目した実証的な比較分析を中心に以下のように研究を進めた。

(1) 報告者が収集した戦国簡牘資料（楚簡資料16種、秦簡資料8種）について、以下の手順により分類・整理を行なう。

① 楚簡について現地性文献と見なされる〔文書類〕と現地性文献と非現地性文献との両者を含む〔書籍類〕とに区分する。

② 秦簡および楚簡の〔文書類〕に属する資料について、さらに遺策・法律・行政文書など、資料の性格に応じた下位分類を行なう。

(2) 整理・分類にもとづき、以下の手順で研究を進める。

① 現地性文献である〔文書類〕の実態を把握し、秦簡文字と楚簡文字との形体上の相違について分析を加える。

② 〔文書類〕における秦簡文字と楚簡文字との形体上の相違を明らかにし、秦と楚における文字の地域差の実態について考察を加える。

③ 〔書籍類〕における現地性文献と他地域で作成され楚に流入した可能性をもつ非現地性文献との文字の相違に着目し、他地域の文字の混淆について考察を加える。

4. 研究成果

本研究によって得られた主要な成果として、以下の4項目が挙げられる。

(1) 稚拙性をおびた字体をもつ楚簡の資料的性格の解明……現在までに公表された上海博物館蔵戦国楚竹書には、以下のような同じ内容をもつ甲乙両本のテキストからなる4篇の著作が存在する。

- ・『天子建州』甲本・乙本（『上海博物館蔵戦国楚竹書（六）』所収）
- ・『鄭子家喪』甲本・乙本（『上海博物館蔵戦国楚竹書（七）』所収）
- ・『君人者何必安哉』甲本・乙本（『上海博物館蔵戦国楚竹書（七）』所収）
- ・『凡物流形』甲本・乙本（『上海博物館蔵戦国楚竹書（七）』所収）

各篇の甲乙両本は、本文・字体の両面において顕著な共通性を示し、それぞれが極めて近い系譜関係にあることが知られる。また、その中に『鄭子家喪』『君人者何必安哉』のように原本が楚地で著作されたと見なされる楚王故事が含まれること、さらに『天子建州』乙本、『君人者何必安哉』甲本・乙本、『凡物流形』甲本に稚拙性を帯びた特異な書風が認められることなどから、これらは楚地において何らかの関連のもとに書写されたテキストであったと考えられる。

こうした予測のもとに両本の系譜関係を中心に詳細な比較分析を行ない、甲乙両本からなるテキストは、いずれも教学の場を背景とする課本あるいは習本に属し、これらの諸篇を副葬品とする墓主は、楚国の王室や貴族の子弟教育にたずさわった人物だったとの仮説を提起した。上海博物館蔵戦国楚竹書が同一墓からの出土であるとの前提に立てば、上海博物館蔵戦国楚竹書の全体が、教学書あるいは習本で構成された資料群であった可能性も指摘され、多様な書籍で構成される上海博物館蔵戦国楚竹書の資料的性格について、一つの視点を提示することができた。

(2) 水泉子漢簡七言本『蒼頡篇』の中国書史上の位置付け……秦の文字規範を示す『蒼頡篇』の研究の一環として、2008年の水泉子漢簡の出土により新たにその存在が明らかとなった七言本『蒼頡篇』について、先行研究を踏まえつつ、漢代小学書の系統と展開の上から検討を加えた。その結果は以下の4点にまとめられる。

① 七言本『蒼頡篇』は、『蒼頡篇』の理解をうながし識字学習の利便をはかるために、『蒼頡篇』の四字句にそれを敷衍・訓釈する三字を加えた七字句で構成され、広義の注釈書としての性格をもった訓蒙書と見なされる。

② 七言本『蒼頡篇』の成立時期は、付加された三字部分にみえる「萬石君」の語と漢代

小学書の系統と時代性との関連から、『蒼頡篇』がなお識字書の主流の位置を占めていた前漢中期の武帝期から宣帝期にかけての頃と推定される。

③七言本『蒼頡篇』は、『急就篇』『元尚篇』に先行し、さらに『凡将篇』以前に存在した可能性も考慮されることから、秦代の『蒼頡篇』から漢代の七言本字書へと展開する過程において、重要な位置を占めていたと見なされる。

④七言本『蒼頡篇』は毎句の句意を敷衍・訓釈する形式をもつことから、注釈書系統との関連が注目され、『漢書』芸文志に著録されながら従来全く手がかりが得られなかった『蒼頡伝』に該当する可能性が指摘される。

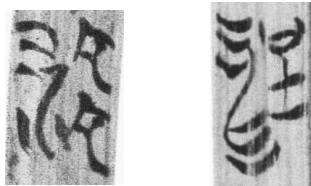
(3) サンズイを中心とする戦国文字の実態の解明……戦国期において「水」偏を三本の短い横画であらわした、いわゆるサンズイの用例が認められるのは、現時点では秦系の資料のみであり、それ以外の資料はすべて単体の「水」字と同様、水の流れる形を象った繁体に作る。資料が限定されるため即断はできないが、こうした状況はサンズイが秦において独自に成立した俗体であった可能性を示唆する。一方、六国文字にくらべて強い保守性を示す秦文字のなかでも、サンズイは例外的に変化の著しい俗体であったことが指摘されており、秦隸の性格を把握する上において、ひとつの鍵をなすものと見なされる。

このような予測のもとに、戦国期の出土文字資料を中心にサンズイの実態とその成立過程について検討を加え、以下の4点を明らかにした。

①銅器銘文と簡牘資料を中心とする秦系資料の分析によれば、秦の領域においては戦国後期から秦代にかけて一貫してサンズイが通行していたと推測される。

②戦国中期の書写と推定される秦駟玉版の検討によれば、秦ではすでに戦国中期の恵文王期において、サンズイをはじめとする俗体が一定の位置を占めていたと見なされる。

③サンズイの成立過程について秦系資料にみえる「水」偏の形態を中心に検討を加え、初期サンズイの形体上の特色を明らかにするとともに、上海博物館蔵戦国楚竹書に見える「水」偏の諸相を分析した結果、サンズイは「水」偏の上部を三本の短い横画のように書く俗体(下図参照)を仲立ちとし、最終的に上部の三画のみが独立することによって成立したと考えられる。



サンズイの成立過程を簡潔にまとめると以下のとおりである。

曲線を主体とする繁体

↓

(I) 方折化による屈曲式への形体変化

↓

(II) 下部との分離に伴う冒頭部(三画)の運筆変化

↓

(III) 下部の削減

↓

サンズイの成立

④サンズイの通行の状況から推して、秦隸はすでに戦国中期には秦の通行体として定着をみている可能性が高く、サンズイをはじめとする秦隸が、秦の通行体として一定の位置を占めるに至った背景には、急速で強制力をもった政策的な要因が考慮される。

(4) 清華大学蔵戦国竹簡『保訓』を中心とする戦国簡牘文字の実態の解明……『保訓』は2008年に清華大学が香港から購入した戦国中晩期と推定される竹簡11枚からなる古逸書であり、周の文王が太子の発(武王)に対して述べた遺言を内容とする。

『保訓』はすでに古代史・思想史の分野を中心に研究が進展しているが、一方で複数の研究者により偽物説が提起されている。その論拠のうち文字・書法に関する疑点は、比較的客観性をもつ論拠として注意されるが、その見解には首肯しがたい点が多く、少なくともこれらを根拠に『保訓』を偽物と断定することは困難である。

そこであらためて『保訓』のすべての文字について、楚簡・秦簡・金文・伝抄古文などの古文字資料との詳細な比較分析を試みた結果、以下の2点が指摘された。

①『保訓』と三体石経との字体の共通性は、両者がともに正体の様式に由来することを示唆しており、金文の正体と簡牘の俗体をつなぐ資料として、書体史上きわめて重要な意義をもつ。

②『保訓』には、楚系文字を基盤としつつ同時に楚簡習見の形体とは異質の要素が認められる。特にこれまで指摘されていない秦系文字との関連が見いだされたことは、戦国文字の多様性を解明する上で注目に値する。

以上の4項目におよぶ研究成果は、「戦国簡牘文字の多様性の問題」、「秦の文字統一前後における形体変化の問題」という二つの新たな研究課題に結びつくものである。一方、資料面においても、上海博物館蔵戦国楚竹書(第8分冊)や銀雀山漢墓竹簡(第2分冊)などの続冊が刊行されると同時に、清華大学

蔵戦国竹簡、岳麓書院蔵秦簡、北京大学蔵西漢竹簡など新資料の公表が進展しており、報告者は平成21年に清華大学において清華大学蔵戦国竹簡の一部を、平成22年に北京大学において北京大学蔵西漢竹簡の一部をそれぞれ実見し、整理・釈読を担当している各大学の研究者から資料の内容や性格などについて説明を受け、その重要性をあらためて認識することができた。

今後は新資料の公表を踏まえながら、戦国簡牘文字の地域差に関する本研究の成果を多様性という観点から深化させるとともに、時代範囲を拡大することにより、戦国から秦漢にかけての古代漢字の変遷の過程を通時的に解明していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 福田哲之、『天子建州』甲乙本の系譜関係、中国出土文献研究2010 中国研究集刊 別冊、査読有、第52号、42—60頁、2010年
- ② 福田哲之、水泉子漢簡七言本『蒼頡篇』考一『説文解字』以前小学書における位置一、東洋古典学研究、査読有、第29集、2010年、1—17頁(中文訳を武漢大学簡帛研究中心「簡帛」インターネット〈2010年11月26日〉に発表)
- ③ 福田哲之、上海博物館蔵戦国楚竹書の特異性一『君人者何必安哉(甲本・乙本)』を中心に一、中国研究集刊、査読有、第50号、228—247頁、2010年
- ④ 福田哲之、上博楚簡『武王踐阼』簡6・簡8簡首缺字説、中国研究集刊、査読有、第48号、2009年、69—74頁(中文訳を武漢大学簡帛研究中心「簡帛」網インターネット〈2009年3月24日〉に発表)
- ⑤ 福田哲之、別筆と篇題一『上博(六)』所収楚王故事四章の編成一、中国研究集刊、査読有、第47号、24—42頁、2008年(中文訳を武漢大学簡帛研究中心「簡帛」インターネット〈2008年11月15日〉に発表)

[学会発表] (計3件)

- ① 福田哲之、清華簡『保訓』の文字学的検討、第22回書学書道史学会大会、2011年11月13日、大東文化大学
- ② 福田哲之、上海博物館蔵戦国楚竹書の特異性一(君人者何必安哉)甲本・乙本爲中心一、「漢字圏之伝統与現代」国際学術研討会、2009年11月28日、台湾・明道大学
- ③ 福田哲之、別筆和篇題一《上博(六)》所

収楚王故事四章の編成一、国際学術研討会—東アジア文化の発生・変遷・交流—、2008年10月25日、台湾・致遠管理学院

[図書] (計4件)

1. 谷中信一編、汲古書院、出土資料と漢字文化圏、2011、97—120
2. 書学書道史学会編、萱原書房、書学書道史論叢、2011、465—493
3. 湯浅邦弘編著、ミネルヴァ書房、概説 中国思想史、2010、270—286
4. 浅野裕一編、汲古書院、竹簡が語る古代中国思想(三)—上博楚簡研究一、2010年、203—263頁

[その他]

ホームページ等

<http://www.edu.shimane-u.ac.jp/edu/Senkou/Gengo/Kokugo/fukuda-t.html>

<http://www.shutudo.org/>

<http://www.bsm.org.cn/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福田 哲之 (FUKUDA TETSUYUKI)
島根大学・教育学部・教授
研究者番号：10208960

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：